機械学習レポート

機械学習とモデリングプロセス

▶ 機械学習

- ▶ コンピュータプログラムは、タスクTを性能指標Pで測定。その性能が経験Eにより改善される場合、タスクTおよび性能指標Pに関して経験Eから学習すると言われている(トム・ミッチェル 1997)
- ▶ 人がプログラムするのは認識の仕方ではなく学習の仕方
- ▶ モデリングプロセスで最も重要なことは問題の設定。解き方(手段)として必ずしも機械学習が最適ではないことも考慮する。

モデリングプロセス

プロセス		概要		
1	問題設定	どのような課題を機械学習に解決させるか		
2	データ設定	どのようなデータを扱うか		
3	データの前処理	モデルに学習させられるようにデータを変換		
4	機械学習モデルの選定	どの機械学習モデルを利用するか		
5	モデルの学習	パラメータの決め方		
6	モデルの評価	ハイパーパラメータの選定モデル精度を測る		

重要

線形回帰モデル 要点

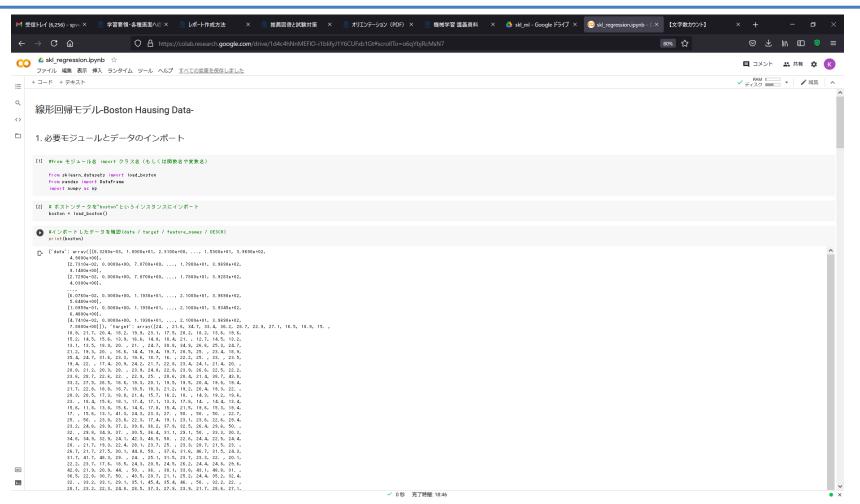
- ▶ 線形回帰モデルは単回帰モデルと重回帰モデルがある。
 - ▶ 単回帰モデル (m=1の場合)

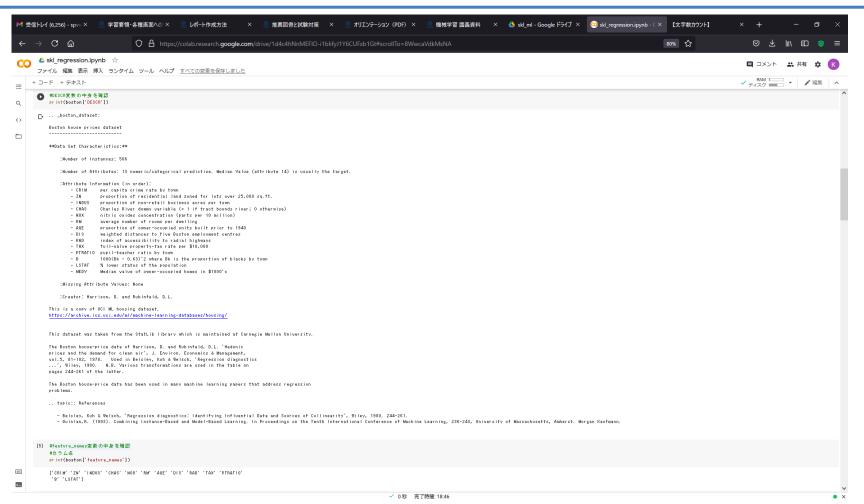
```
モデル式: y = \omega_0 + \omega_1 x_1 + \epsilon
```

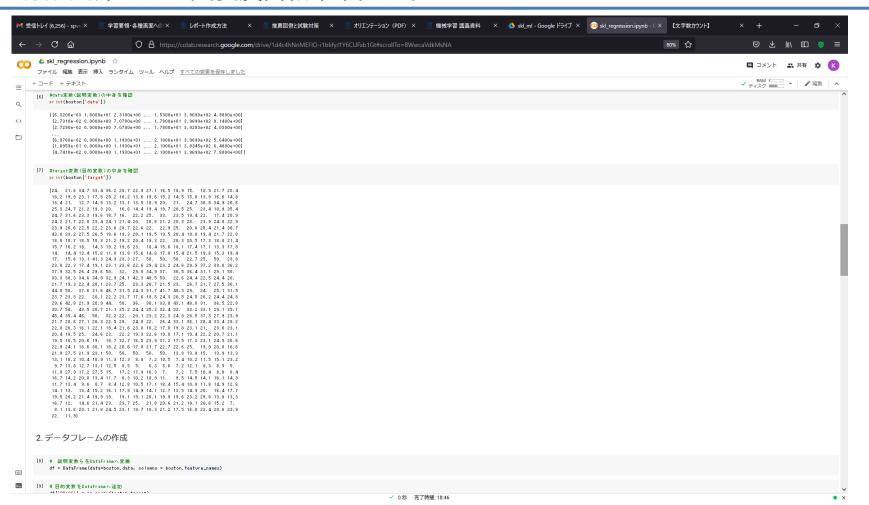
- % y:目的関数、 $ω_0$:切片、 $ω_1$:回帰係数、 x_1 :説明変数、ε:誤差
- ▶ 重回帰モデル (m>1の場合)

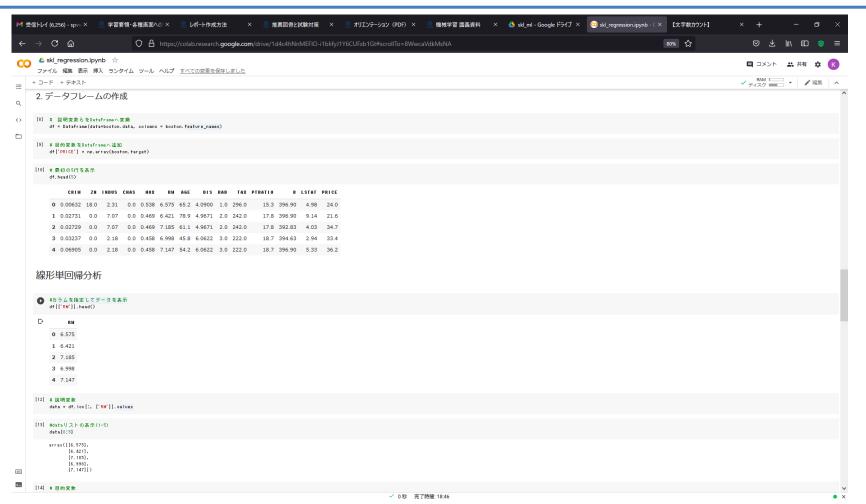
```
モデル式: y = \omega_0 + \omega_1 x_1 + \omega_2 x_2 + \epsilon
```

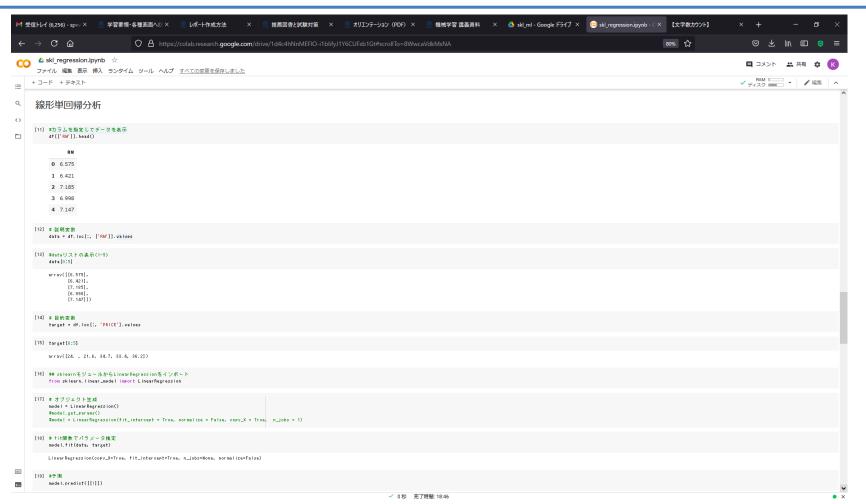
- %y:目的関数、 $\omega_0:$ 切片、 $\omega_1,\omega_2:$ 回帰係数、 $x_1,x_2:$ 説明変数、 $\epsilon:$ 誤差
- ▶ 線形回帰モデルのパラメータは最小二乗法で推定する

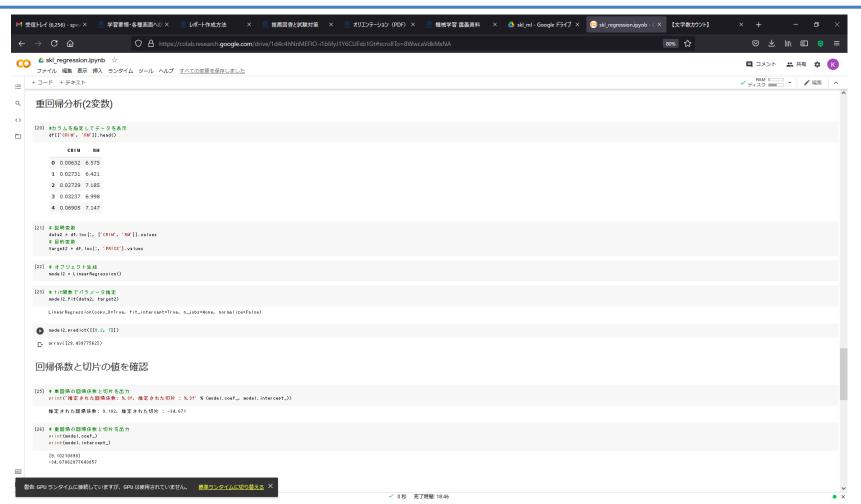


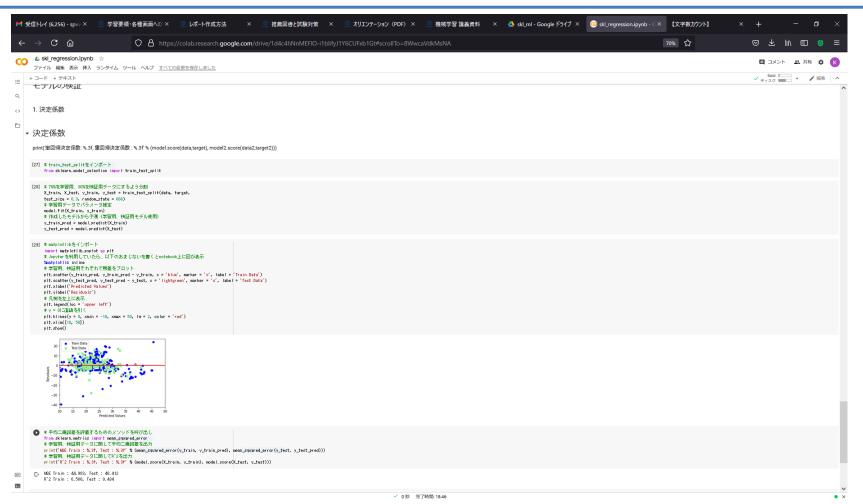












非線形回帰モデル

▶ 線形回帰モデルは説明変数に対する目的関数が線形のため、データの非線形に対応できない。 そこで非線形性に対応する方法が基底展開法である。基底関数によって説明変数を非線形変換し、線形回帰モデルで学習する方法。

▶ 基底展開法

- ・回帰関数といて、基底関数と呼ばれる既知の非線形関数とパラメータベクトルの線形結合を使用
- ・未知のパラメータは最小二乗法や最尤法により推定する

$$y_i = f(x_i) + \varepsilon_i$$

 $y_i = \omega_0 + \text{sum}[i=1 \text{ to m}] \omega_j \Phi_j(x_i) + \varepsilon_i$

▶ 未学習と過学習

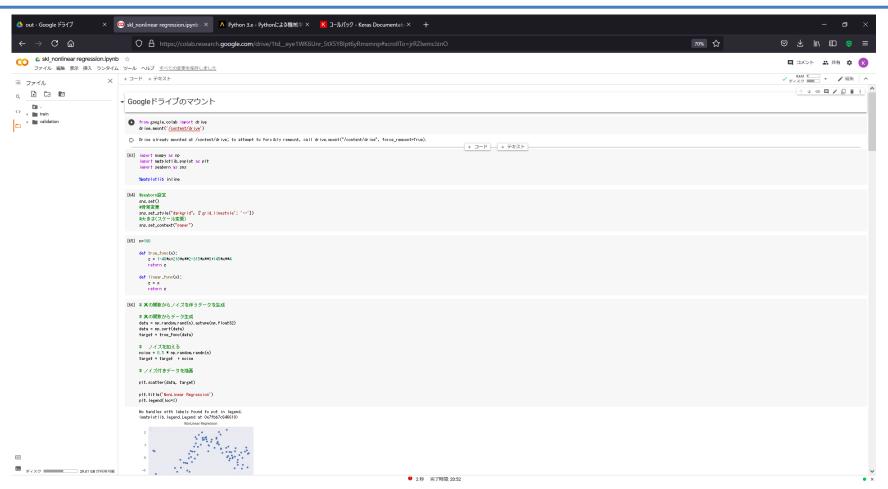
・未学習:学習データに対して、十分小さな誤差とならない状態

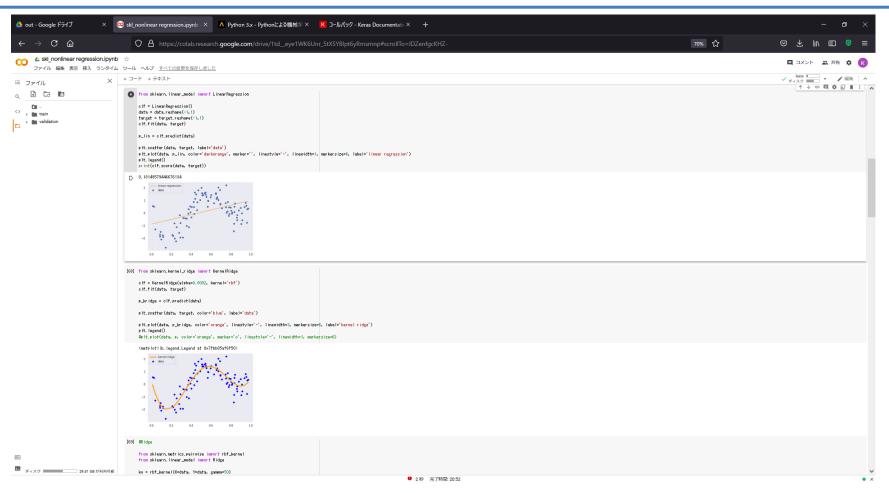
・過学習:学習データを忠実に再現してしまい、未知のデータに対する汎化性がなくなってしまった状態を指す (=訓練データに対する誤差(訓練誤差)は小さいにもかかわらず、テストデータに対する誤差(汎化誤差)が小さくならない状態)

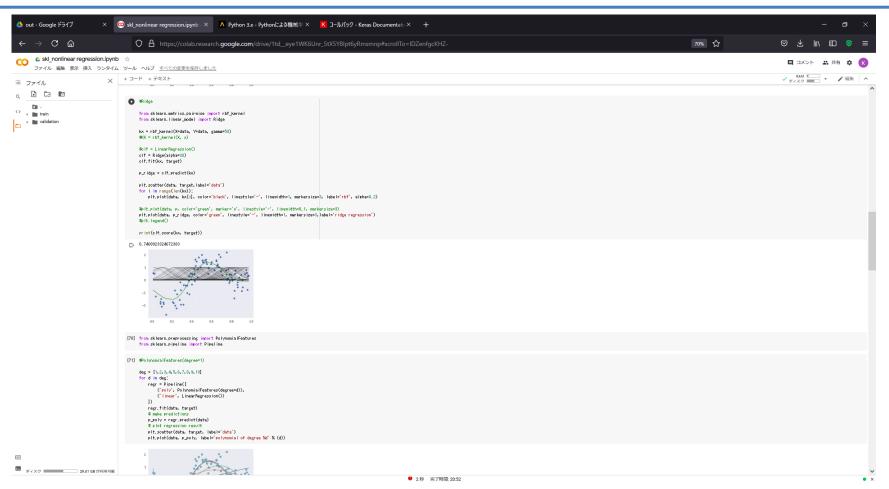
- ▶ 過学習を防ぐ手法として正則化がある。
 - ・正則化とはモデルを学習する際に、複雑さが増すことに対するペナルティを設け、ペナルティを訓練誤差に加えた量が最も小さくなる学習モデルを求めること。 これにより汎化性能を高める。
 - ・複雑さの指標として、L1ノルム(L1正則化:ペナルティとして学習モデルのパラメータの絶対値の総和を用いる)、L2ノルム(L2正則化:ペナルティとして学習モデルのパラメータの二乗の総和を用いる)等がある。
 - ・L1正則化は特定のデータの重みをOにすることで不要なデータを削除する、L2正則化はデータの大きさに応じてOに近づけて滑らかなモデルとする特徴を持つ。

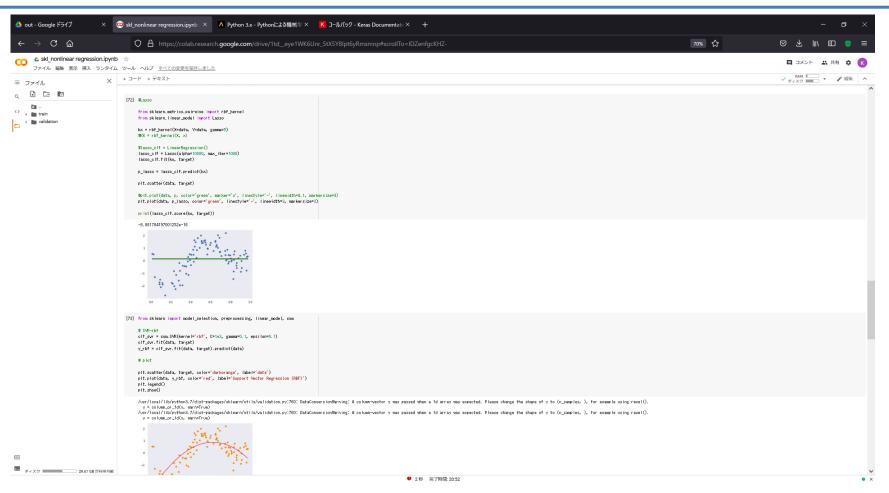
参考:

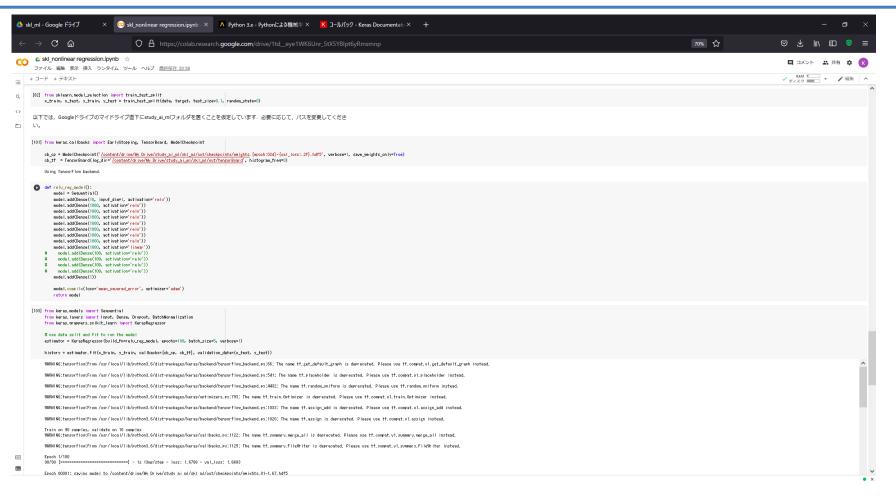
https://qiita.com/fridericusgauss/items/3052ba024521f50bd666 https://qiita.com/kenta1984/items/91ab29fae8cd3920cf2b https://gihyo.jp/dev/serial/01/machine-learning/0009?page=3 https://www.techcrowd.jp/machinelearning/regularization/

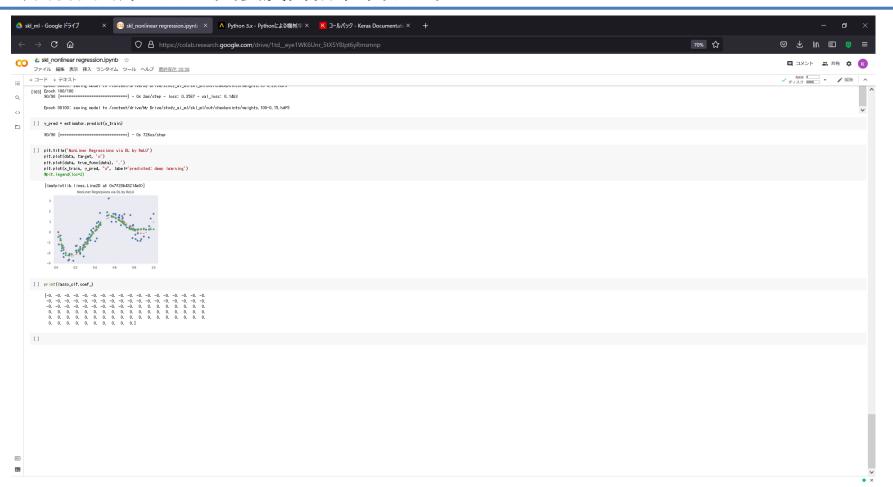












ロジスティック回帰モデル

- ▶ ロジスティック線形回帰モデル
 - ・分類問題(ある入力からクラスに分類する問題)を解くための教師あり機械学習モデル
 - ・入力とm次元パラメータの線形結合をシグモイド関数に入力
 - ・出力はy=1になる確率の値になる

$$y = \omega^T x + \omega_0$$

▶ シグモイド関数は入力は実数、出力は必ず0~1の値

$$1/(1+\exp(-ax))$$

- ▶ シグモイド関数の性質
 - ・シグモイド関数の微分はシグモイド関数自身で表現することが可能
 - ・尤度関数の微分を行う際にこの事実を用いると計算が容易
- ▶ 最尤推定
 - ・ロジスティック回帰モデルではベルヌーイ分布(確率pで1、確率1-pで0を取る離散確率分布)を用いる。

$$P(y) = p^{y}(1-p)^{1-y}$$

- ▶ 同時確率
 - ・あるデータが得られたとき、それが同時に得られる確率
 - ・確率変数は独立であることを仮定すると、それぞれの確率の掛け算となる
- > 尤度関数
 - ・データは固定、パラメータを変化させる
 - ・尤度関数を最大化するようなパラメータを選ぶ推定方法を最尤推定という

参考:

https://qiita.com/0NE_shoT_/items/b702ab482466df6e5569 https://waidai-csc.jp/updata/2018/08/seminar-igaku-20171222.pdf

ロジスティック回帰モデル

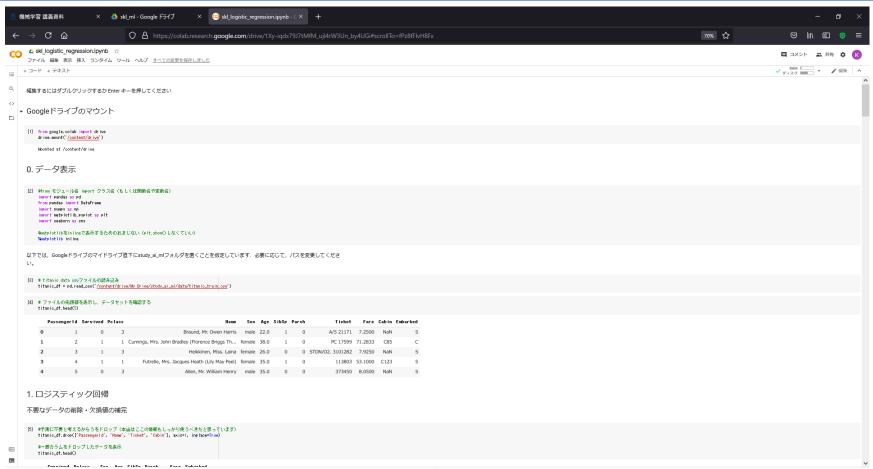
- > 勾配降下法
 - ・反復学習によりパラメータを逐次的に更新するアプローチのひとつ
- ▶ 確率的勾配降下法
 - ・データを一つずつランダムに選んでパラメータを更新
- ▶ 混同行列は下表のとおり
 - •正解率: (TP+TN)/(TP+FP+FN+TN)、精度(再現率): TP/(TP+FP)、真陽性率(適合率): TP/(TP+FN)、

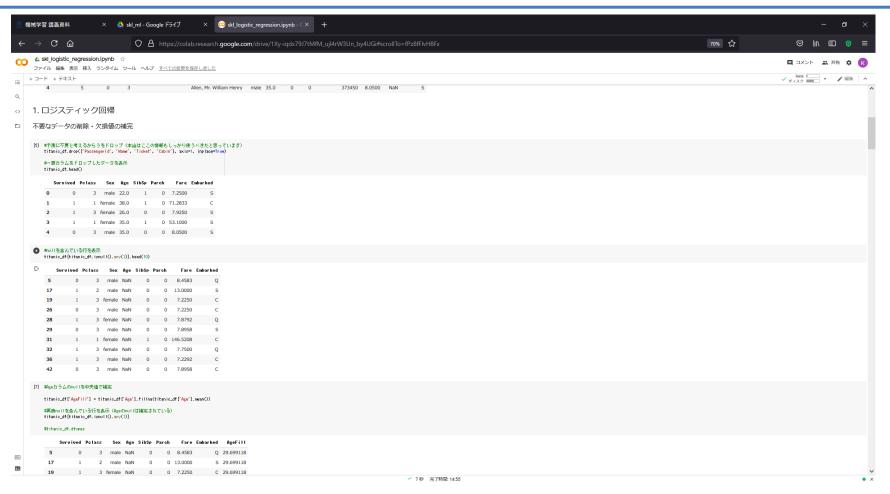
真陰性率:TN/(FP+TN)、偽陰性率:FN/(TP+FN)、偽陰性率:FP/(FP+TN)

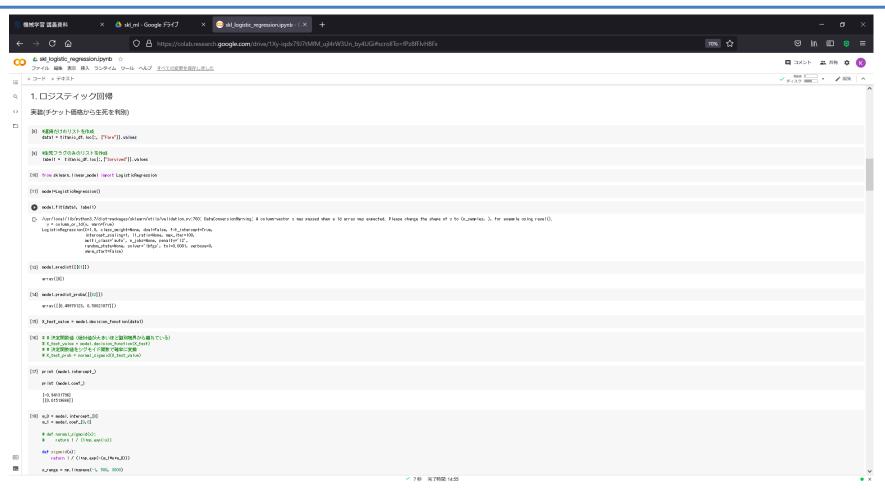
・F値とは再現率と適合率の調和平均(逆数の平均の逆数)

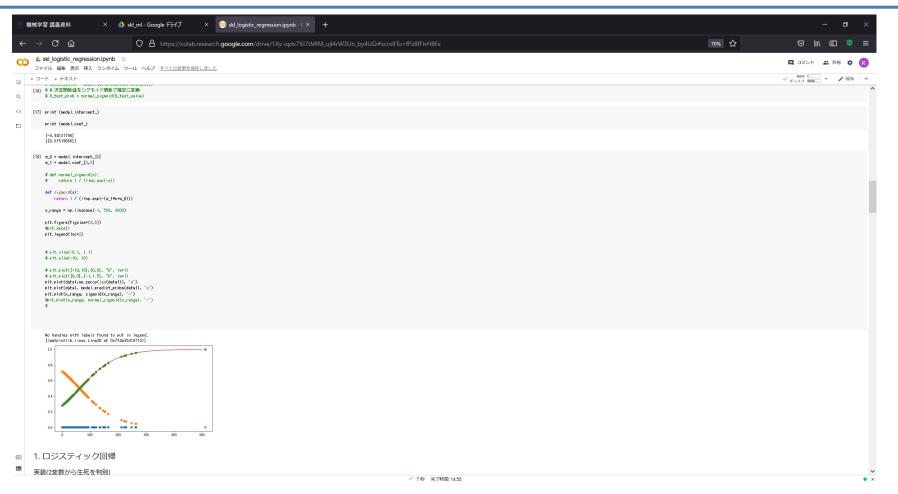
		機械学習モデルの予測	
		Positive	Negative
実際のクラス	Positive	True Positive 真陽性	False Negative 偽陽性(間違えてNegativeと判別した個数)
	Negative	False Positive 偽陰性(間違えてpositiveと判別した個数)	True Negative 真陰性

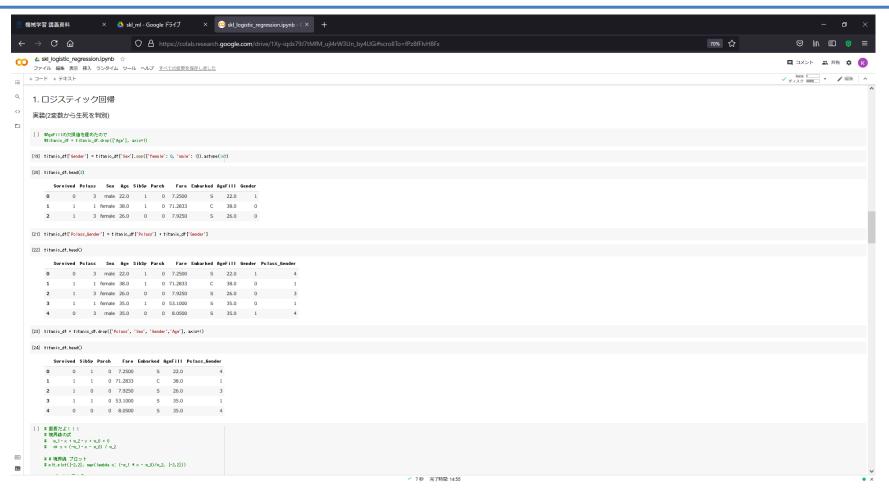
参考: https://qiita.com/TsutomuNakamura/items/a1a6a02cb9bb0dcbb37f https://analysis-navi.com/?p=550

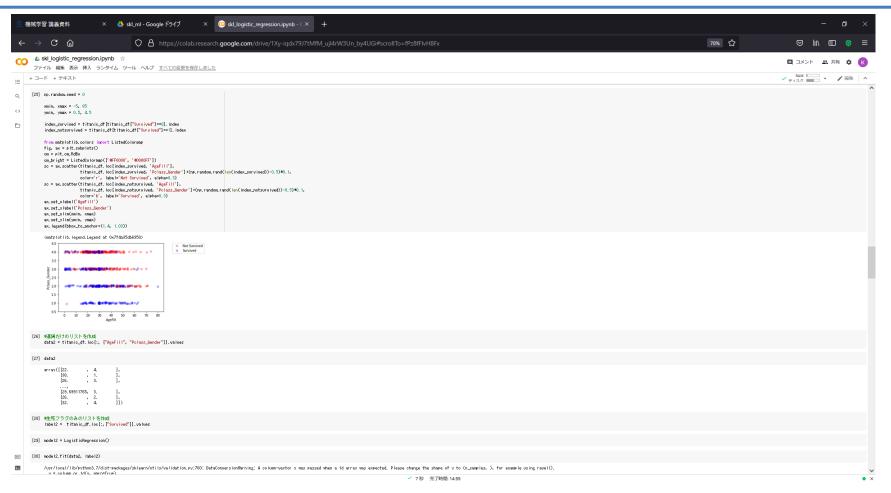


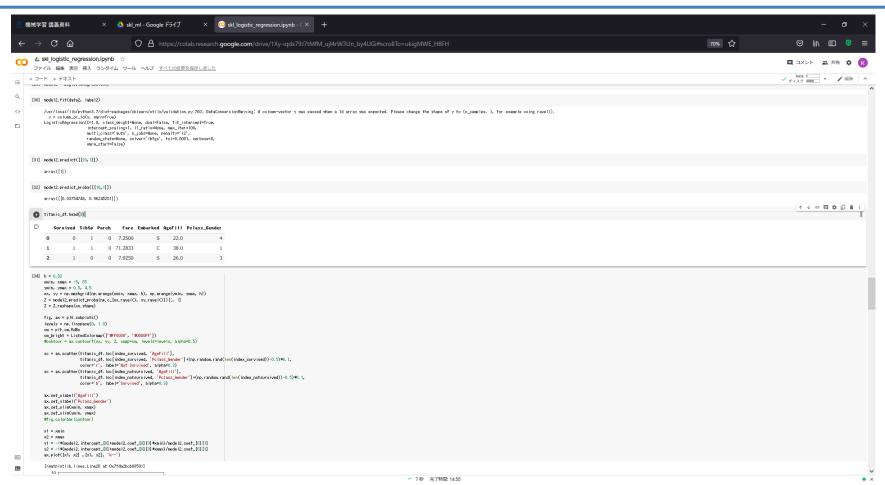


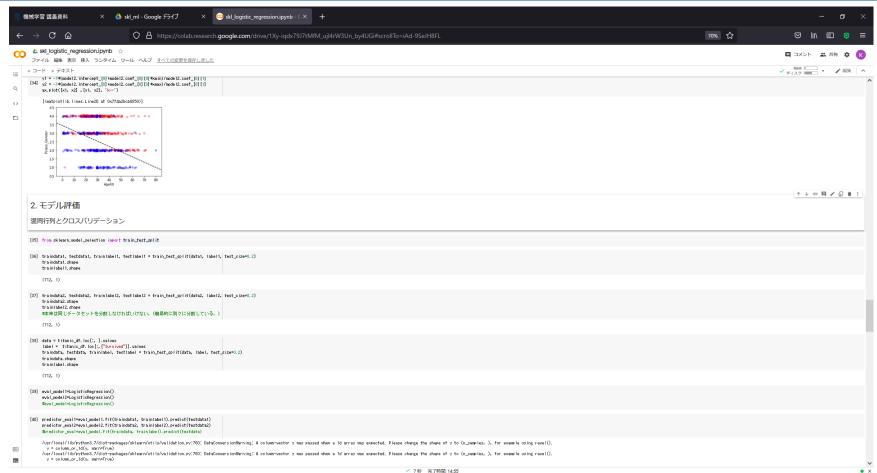


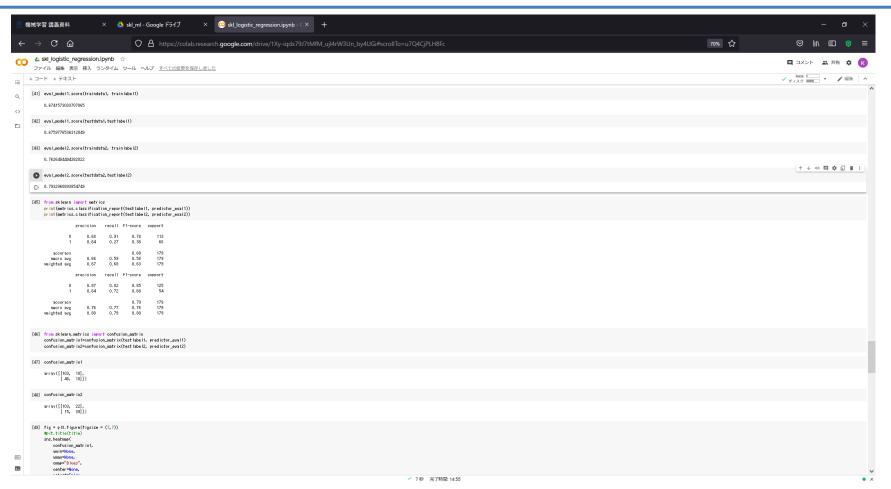


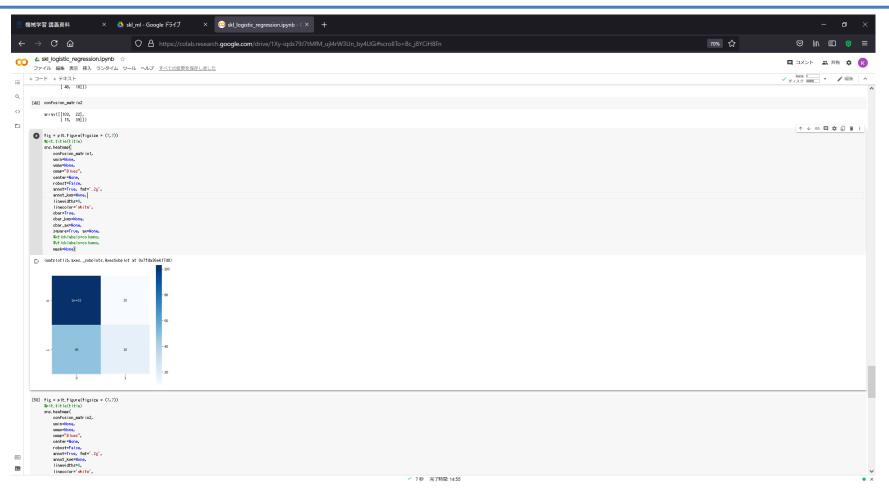


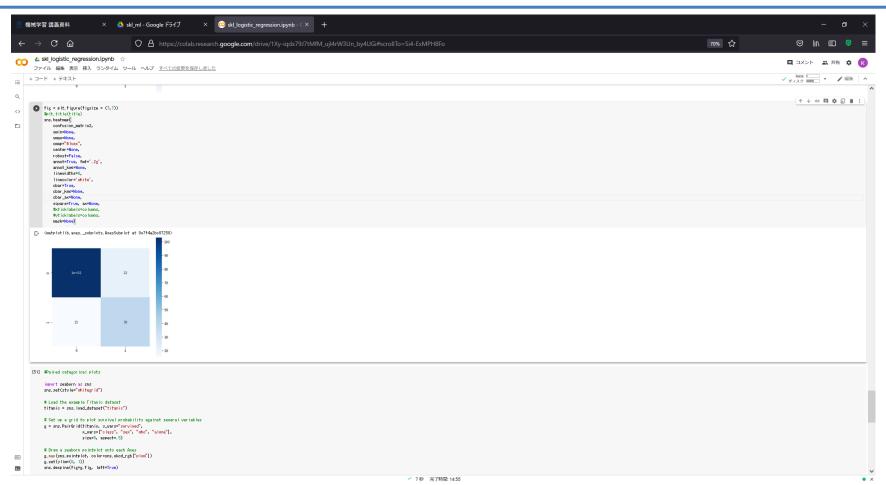


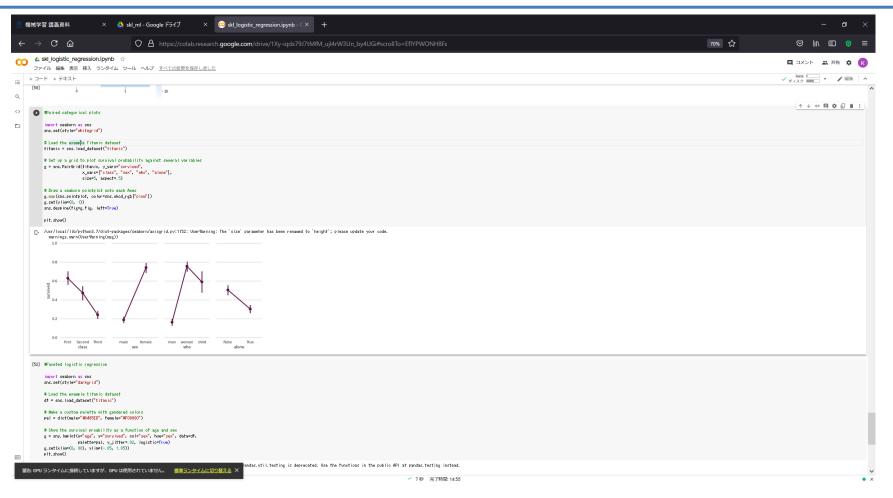


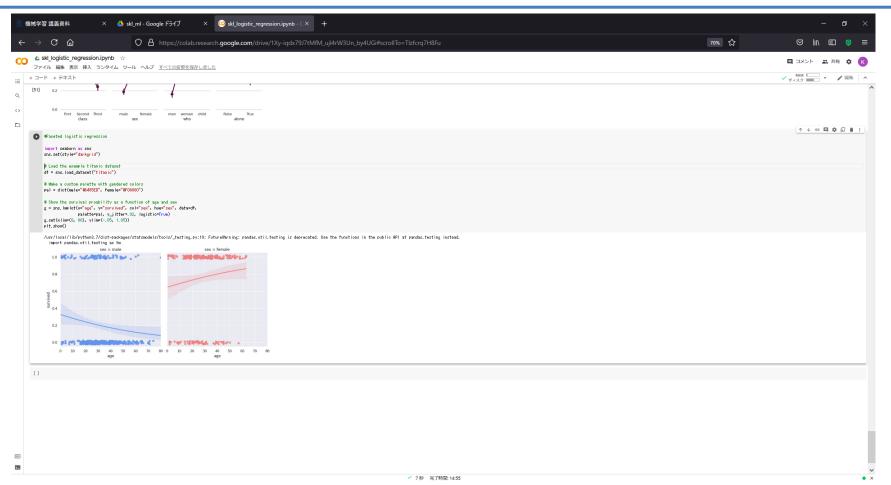








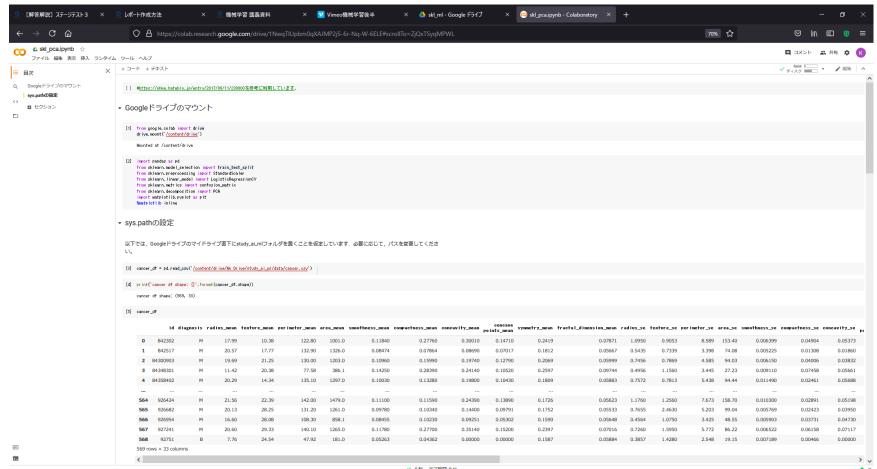




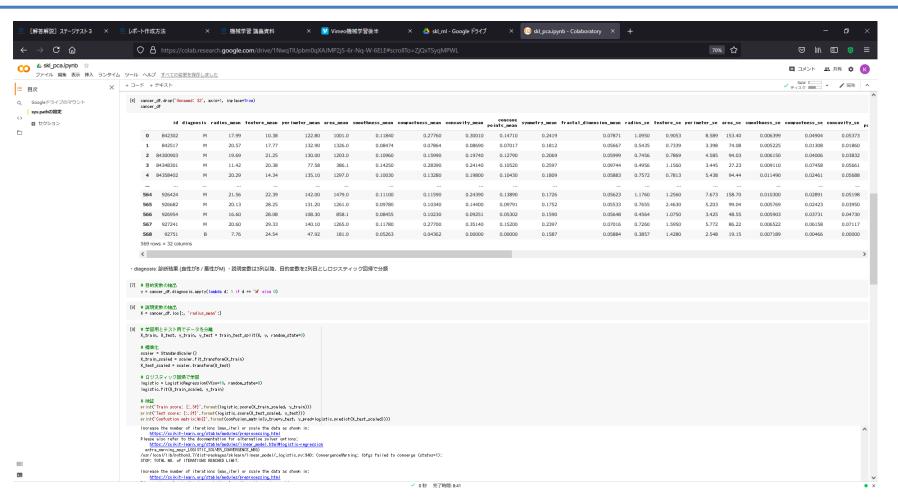
主成分分析

- ▶ 主成分分析は多変量データの持つ構造をより少数個の指標に圧縮する(次元の縮約)
 - ・変量の個数を減らすことに伴う、情報の損失をなるべく小さくしたい
 - ・少数変数を利用した分析や可視化が実現できる(視覚化により、データが持つ情報を解釈しやすくなる)
- ▶ 主成分を与える変換は、第一主成分の分散を最大化し、続く主成分はそれまでに決定した主成分と直交する条件の下で、分散を最大化するよう求める。
- ▶ 寄与率(第k主成分が持つ情報量の割合):
 - ●第1~次元分の主成分の分散は、元のデータの分散と一致
 - ・2次元のデータを2次元の主成分で表示したとき、固有値の和と元のデータの分散が一致
 - ・第k主成分の分散は主成分に対応する固有値

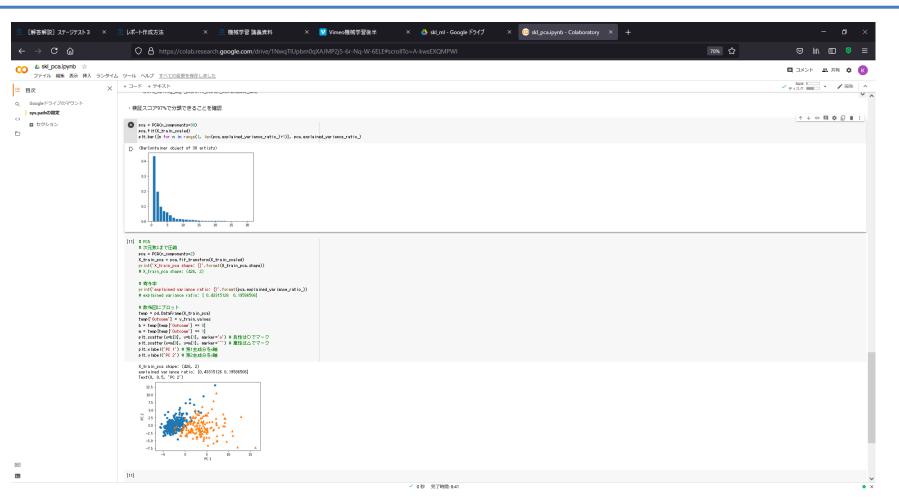
主成分分析 実装演習結果キャプチャ



主成分分析 実装演習結果キャプチャ



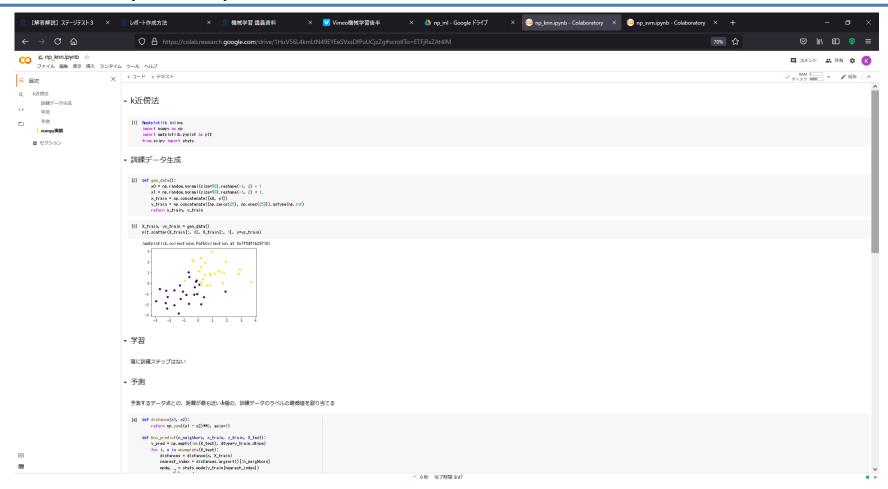
主成分分析 実装演習結果キャプチャ



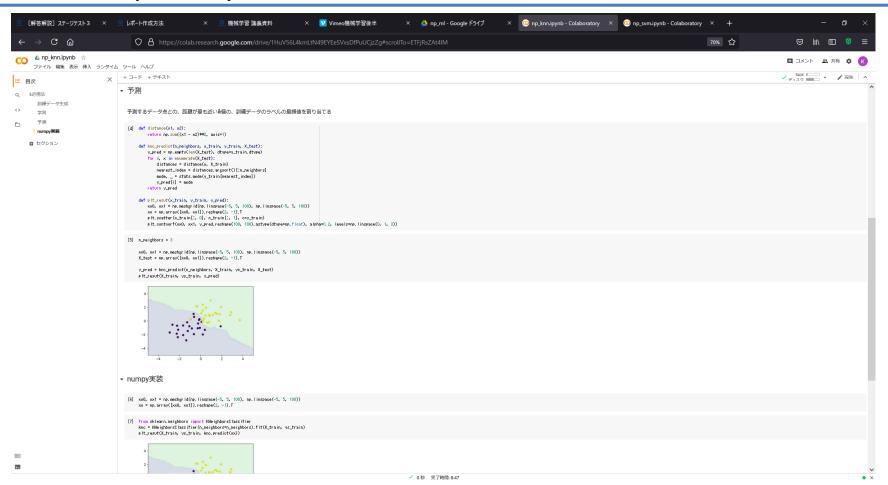
アルゴリズム

- ▶ k近傍法(教師あり学習の分類問題)
 - ・最近傍のデータをk個とってきて、それらが最も多く所属するクラスに識別する
 - ・kの値を変化させると結果も変わる
- ▶ k-means (教師なし学習でクラスタリング(特徴の似ているもの同士をグループ化する)手法)
- ▶ k近傍法とk-meansの両方に当てはまる特徴として、いずれのアルゴリズムも距離計算を行うことがあげられる

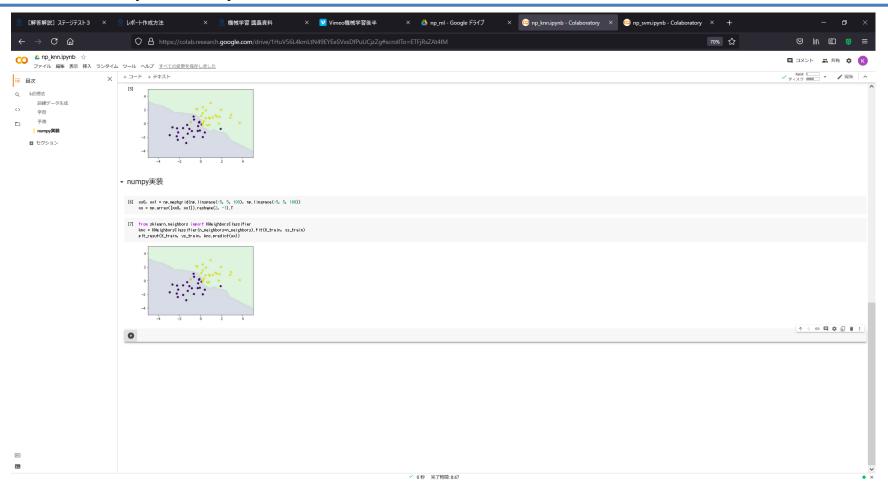
アルゴリズム(k近傍法) 実装演習結果キャプチャ



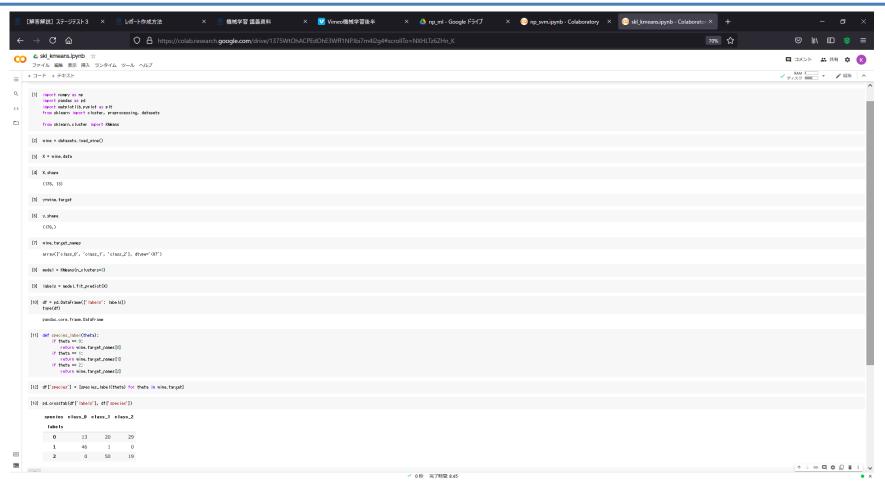
アルゴリズム(k近傍法) 実装演習結果キャプチャ



アルゴリズム(k近傍法) 実装演習結果キャプチャ



アルゴリズム(k-means) 実装演習結果キャプチャ



SVM

- ➤ SVM (サポートベクトルマシン) は1990年代に提案され、2000年代前半に急速に発展した手法
 - ・信号処理医療アプリケーションや自然言語処理、音声および画像認識などの多くの分類と回帰の問題に使用される教師あり学習アルゴリズム
 - ・目的は、あるクラスのデータ点を、別のクラスのデータ点から、可能な限り分離する超平面を見つけること。 境界と各クラスのデータ点との最短距離をマージンと呼び、マージンが最大になるよう境界を学習する。
 - ・マージン上にあるデータ点をサポートベクトルと呼ぶ。
- ▶ カーネルトリック: 高次元に写像しながら実際には写像された空間での特徴の計算を避けて、カーネルの計算のみで最適な識別関数を構成するテクニック。
 多項式カーネル、ガウスカーネル、シグモイドカーネルなどが使われている。

